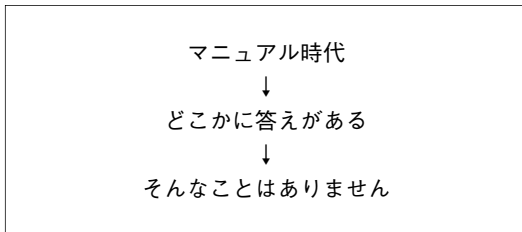


自分の頭で考えませんか

斎藤 栄二 Saito Eiji

(京都外国語大学 / 関西大学英語教育連携センター)

1 みなさんどう思いますか



これはある研究会でのやりとりです。教え方のレベルアップに関するワークショップのあと、パネルディスカッションとなりました。テーマは「今後の研修に望むこと」です。

一人の若い教師が手をあげて発言し始めました。「例えば、教科書のあるページを指導するとする。そうすると、そのページの指導目標は何か。それを話してほしい。そのあとその目標に従ってどう指導したらよいのか。まず導入の仕方、新出単語の扱い方、文法項目の説明の仕方、それらの導入に続いて、そのあとの授業の展開の仕方、音読のさせ方や、指名の仕方などを話してほしい」

この先生は教えた経験も2、3年はありそうなので話も具体的で詳しい。そのあとさらに続きます。

「最後に評価です。このページの学習をした生徒の評価はどうするのか、その項目や評価の仕方を話してほしい」

みなさんはこの話をどう思いますか。もっともなことだと思いますか。それともどこか変だと思いませんか。助言者席に座っていた私は大袈裟に言うことや気分がわるくなってきました。

「おい、おい、君は誰かに君の家庭教師をさせる気か」

2 説明の英語の文をピクチャーカードの裏に印刷しておいてほしい

私はもう少し若いときは、よく飛び込んで「モデル授業」というものをやりました。

あるときの授業は、中学2年生が対象で、私は教科書会社から出している大型のピクチャーカードを3枚ほど教室に持って行きました。これを紙芝居ふうに使いつつ oral interaction をやりました。教科書のその日のページに載っている文章の数はおそらく6～7 sentences くらいであったと思います。その内容を理解させるために、私は oral interaction では40以上の文を聞かせたと思います。この授業のデモンストレーションを終わったあとで、例によって授業研究会となりました。そのとき最初に出てきた質問は、

「先生は生徒に絵を見せながら、わかりやすい易しい英語の文で、今日の内容を説明していかれました。あの英語の文はどうなされたのですか？」

という質問です。私の返事は、

「これらの英文は、自分で書いて大体覚えて授業に臨みました」

と言いつつ、ピクチャーカードを裏返して、そこにセロテープ等で貼っておいた私の手書きのメモをお見せしました。そのときに出てきた質問は、私の予想していなかったものです。

「先生、その英語の文をピクチャーカードの裏に印刷しておいてもらえませんか」

この質問のあと何年か経ちましたが、現在では教科書会社が出しているピクチャーカードの裏には oral interaction 用の英文が印刷されるようになりました。

みなさんはこれをどう思いますか。「便利なんだから結構じゃないの」と思うほうですか。それとも

「ちょっとおかしいぞ」と思うほうですか。おそらく「ちょっとおかしいぞ」派は少数派でしょう。でも私はその少数派なのです。

3 問題点は何なのか

1で述べた若い教師の要望、そして2で述べたピクチャーカードの件も、私は「これはおかしいぞ」と反応したと書きました。なぜでしょうか。両方の先生にいえるのは、「どこかに教え方についてはマニュアルとしてきちんと書かれたものがあるはずだ」というような信念があるからです。そのマニュアルに従えば、よい授業ができると考えているのではないのでしょうか。ところがそんなことでよい授業ができるわけではありません。

ついですが、私が教師になったころは教科書についてきた教師用指導書は1冊だけでした。今では教科書のマニュアルを見ると、NEW CROWNの場合は①指導・評価編 ②解説・活用編 ③Team-Teaching Manual ④言語活動ワークシート集 ⑤Teacher's Book ⑥音声CD／指導用CD-ROMで、私が教師になったころの6倍です。

ここで急いで断っておきますが、私は「昔の方がよかった」という気持ちは毛頭ありません。「よかったこともあるしわるかったこともある」。事柄によりけりです。でも過重なマニュアル依存については、私は警告を発しておきたいと思っています。

こういうマニュアルを提供するようになってきたのは、常日頃教えている先生から、例えば「チームティーチングでの教え方について英語でやり取りするのは大変だから、ALTに読んでもらえば、今日の授業のねらいや進め方がわかる英文で書いたALTマニュアルがあったらと思う」などという要望がでてくる。その総和として今日の状況になってきているのです。そういう教材作成に私は30年近くも携わっているわけですから、マニュアル時代を作ってきた責任の一端は私にもあるとよいでしょう。それどころか私は多くの研究会で、若い先生方に「まず、これらのマニュアルをきっちと読みこなしてほしい」と何度か言ってきました。

なぜならしっかりとした背景的知識もなく、無防備で教室に出かけて行く先生が、決して少なくない

ことを知っているからなのです。「マニュアル」を精読すれば、教えるうえでのヒントはかなり得られます。だからマニュアルの重要性を否定する気持ちは毛頭ありません。

ただ、ここからが分かれ道です。「マニュアルをちゃんと読んでください」ということと、「マニュアル通りに授業をやってください」ということは全然別物です。

4 頭を使う

教育や授業の現場は、マニュアル通りにやればうまくいく、というほど生易しいものではありません。一人ひとりの生徒は生きた身体と心を持ち、その意志によって動きます。それは“ホリエモン”ではありませんが「すべて想定内」などというわけにはいきません。突然想定外のことにぶつかるのです。

先日見ていたある授業のことです。そのクラスの英語の先生は「本日の目的は三単現のsです」ということで指導を始めました。その先生が「ここでは動詞にsをつけます」と言いました。そうしたら後ろの方の生徒が「あ、複数のsだ」と言いました。その声は先生にも届いたはずですが、しかしこの発言は想定外だったのか、授業はそのまま淡々と進みました。私は教室の後ろで見ていたのですが「あ、ここは1つのポイントだ」と心の中で叫んでいたのです。ここで、三単現のsと複数のsを明瞭にわからせる指導をしておかなければ、あの生徒にとっては、これからかなりの間、三単現のsと複数のsを、ごっちゃにするだろうということが、私には見えます。こういう場合どう対応するかということはマニュアルには書いてありません。これは一例に過ぎませんが、授業はある意味ではこういう障害物乗り越える仕事です。そのとき教師であるあなたは、マニュアル頼りにできないあなた自身の対応の力が試されるのです。

マニュアルに浸り、マニュアルを超えよ

自分の頭で乗り切る力を育てよう。これが今回の結論です。そのためにはあなたの創造力が必要です。創造的でない教師が生徒に向かって「創造的であれ」などと言っている図は、私にとってはマンガ以外の何ものでもありません。少し言いすぎたかもしれませんが、けれども一緒にがんばりましょう。